

講演二 鞠智城「繕治」の歴史的背景

講演者紹介

森公章（もり きみゆき）

一九八一年東京大学文学部国史学科卒業後、奈良国立文化財研究所文部技官、高知大学人文学部助教授を経て、二〇〇一年より東洋大学文学部教授。

講演二 「鞠智城」「繕治」の歴史的背景

森 公章（東洋大学文学部教授）

はじめに

ご紹介いただきました、東洋大学の森です。私のほうは、「鞠智城」「繕治」の歴史的背景」ということで、今回の話題となっている繕治記事ですね、私はパワーポイントなどは全く使えませんので、資料編二六頁からのところをご覧いただきながら、もっぱらこの舌先三寸でお話をするということになっております。

今まで、考古学のほうから様々な話があつたのですが、私は文献による古代史をやっています、この繕治の記事ですね、最初に挙げました、『続日本紀』の文武二（六九八）年の五月の記事ですね、これだけなんです。これだけで、何をどう考えるかというのは、なかなか難しい。考古学のほうは、毎年新しい発掘成果があるのですが、文献史学といえますか、文献のほうはなかなか限られていますから、この記事の歴史的背景を、いろいろ考えていこうというのがこれからのお話になります。

今までの方々のご報告にもありましたように、鞠智城の発掘の成果によりますと、六九八年前後は、鞠智城の遺構編年ですと、第Ⅱ期という時期で、最も鞠智城が整備されたという時期。そこで、「繕治」という

ものが出てくる背景、それはどういふことがあるのか。

一、古代山城は完成していたのか

最初に古代山城は完成していたのか、というのは、実は昨年の東京のシンポジウムで、亀田修一先生がテーマとされていたわけでした、昨年ご参加になった方は、そういう話があったじゃないかとご記憶があるかもしれません。亀田先生の分類によりますと、完成していた山城と、先ほどご紹介のあった阿志岐山城、これなどは完成には至らないのではないかと。

山城の地図は今までもありましたが、私のレジュメですと、資料編三二頁に同じような分布図がありますから、そちらとも見比べてください。大体『日本書紀』などに出てくる山城、鞠智城も含めてですが、文献史料に出てくる山城は、完成していた部類が多いようです。そして、阿志岐山城のような文献に出てこないものは、未完成であった可能性が大きいのです。

そういった区分がなぜ出てくるのかというので、少し山城のできた契機を考えてみますと、白村江の戦いとその後の防衛の中だというのは、その通りだと思いますが、その後の朝鮮半島の状況を見ていきますと、六六三年の白村江の後、六六八年に高句麗も滅亡しまして、東アジアの中で唐と戦争して



森 公章氏

残っているのは倭国、日本だけになるわけです。

ところがその朝鮮半島では、新羅が百済の領土などを自分のものにしようということで、新羅と唐の戦争が始まります。対立はすでに六六八年の末くらいから始まっています、六六九年、六七〇年、六七一年……だいたい六七一年あたりを見ますと、新羅に有利な形で戦闘が進んでいきます。そのあと、結局、朝鮮半島では六七六年に、資料編二七頁ですけども、このころには新羅がおおむね唐との戦争に勝って、朝鮮半島を統一するという、統一新羅の時代に入っていきます。

特に六七〇年、六七一年あたりですね、朝鮮半島の唐の軍隊がかなりピンチになる、そういう中で、唐の駐留軍、それとその配下にいた元百済の人たちから、倭国へ救援要請というのが来ますけれども、結局は、倭国は白村江の敗戦もありましたから、この時は軍事力を送るという選択をしなかったのではないかと。

逆に言いますと、この六七一年くらいは、唐と新羅が日本に攻めてくるという可能性はかなり減ったということですね。そういう国際情勢が安定した中で、六七二年の五月から壬申の乱という、国内での皇位継承をめぐる争いがありますが、それは国際情勢をある程度見極めた上で、近江朝廷と、大海人皇子……天武天皇ですね、そういう戦いがあるのではないかと。ですから、山城を造る緊急性は去ったという時期で、このあたりが、山城が完成するかしらないかという、分かれ目になるのではないかと思います。

さて、その中で一応完成にまで至って、その後山城がどうなったかが分かるものとして、資料編二七頁に挙げましたように、畿内の防衛に関わります、高安城ですね。奈良と大阪の間にあります。ただ、残念なが

ら高安城は発掘調査はされていなくて、高安城を探る会という市民の団体の方が、いろいろと調査をしているのですが、なかなか全貌は分らないです。ただ文献的には、史料2から史料13に挙げましたように、高安城も比較的文献に出て参りまして、その後の状況が分かります。

資料編二七頁に簡単に様子をまとめておきましたが、史料4・5・6あたりですね、そのあたりをご覧ください。だきますと、高安城には税を納める倉があつて、穀物や塩が備蓄されていたという様子が分かります。また、史料6が壬申の乱の時の記事ですけれども、そこを見ますと、近江方の守備兵がいて、何らかの兵士が配置されていたのではないかという山城の管理形態が分かる。さらに、高安城からはたぶん西の方がよく見える、そういう施設です。

高安城はその後どうなっていくかと申しますと、壬申の乱が終わった後も、天武・持統朝の段階でも、天皇が行幸するといった記事が出てきますし、鞠智城の統治と同じ時期の史料9・10あたりには、修理の記事が見えるんですけれども、史料11の大宝元年、大宝令の施行とともに廃城になります。

しかしその後も、高安峰というところですね、高安のところには烽（と）があつて、残っていたというのがわかります。ただ、都が平城京に移りますと、そういった伝達のシステムなども変わって、それが廃止されるというのが七十二年、史料12（資料編二八頁）の記事です。ただ、そのあとも元明天皇が行幸するという形で、高安城は維持されている。

こういうふうに、修理をする城ですね、それはやはりその後も何らかの用途があり、また、城がなくなっ

でも烽があるとか、様々な機能が維持されるからこそ周知されるのではないか。そういう形から考えますと、鞠智城が修治される背景には、何らかの用途があるのではないか。

二、総領・大宰と山城

二番目ですが、そういった山城はどういった管理がされていたのか。九州の大宰府に關しましては、先ほどの最初の鞠智城修理の記事ですね。これを見ても、皆さんがおっしゃっているように、大宰府が大野城、基肄城と、鞠智城を修理するということから、やはり、大宰府が管理をするということになります。

そういったことは、さらに史料13（資料編二八頁）として挙げました。先ほどの小田さんのスライドにもチラつとありましたが、大宰府政庁の不丁地区から出た木簡の中に、基肄城にある稲を筑前筑後とか、肥とありますから肥前か肥後か分かりませんが、そういうところに分けつといった記事がありまして、その時大宰の大監だいげんという、大宰府の役人がどうも関与したらしいということになりますと、やはり、大宰府が九州の山城を管理していたことが判明します。

大宰府と申しますと、奈良時代以降ですと九州の大宰府ですね。それしかないのですが、七世紀末ごろの史料を見ますと、総領とか大宰たいさいといわれるものが、実は九州以外にもあるということが分かります。『常陸国風土記』にも「坂より已東之国を総領する」という言葉が入るのですが、これはちよつと動詞のように使われていますから、いわゆる役職名ではないと考えると、総領がいましたのは、資料編二八頁に挙げました

ように、吉備と周防と伊予。いずれも瀬戸内海の地域で、山城が配置されているという、そういう地域。さらに、この総領・大宰の役割というのが、一体何であったのか、これはまだ検討課題なのですが、吉備の総領は播磨を統括していましたし、伊予の総領は讃岐を統括しているということで、かなり広域的な行政を管轄する、そういうものではないかと考えられます。

もう少し後、奈良時代に入りまして、養老三年（七一九）に、按察使というものが置かれまして、全国各地域を広域的に統括するという、そういう仕組みが出来上がるのですが、こちら辺の地域ですと、多少組み合わせが違います。按察使ですと、播磨の国守が備前・美作・備中ですから、逆に吉備の地域を統括することになっています。四国では、伊予の国守が、阿波・讃岐・土佐というふうになっていますから、似たようなところがあるかもしれません。こういう広域的な統治をするという、そういう役割があると思います。

それから、総領・大宰のさらにつつこんだ役割というのは、まだ研究課題だと思いますが、山城との関係で言いますと、吉備と周防と伊予、先ほどの地図にも出てきますが、九州から畿内に至る瀬戸内海の中国地方側・四国地方側に山城がずっと置かれていくわけです。九州では大宰府が山城を管理していたとなりますと、やはり総領とか大宰というものが、瀬戸内海の地域でも山城を管理するという仕組みにあったのではないかと解されます。

さらに、山城を造るということは、単に城を造るというだけではありません。当然、山城と山城を結ぶ様々な道路網を造るとか。それから、矢野さんのスライドだったと思うのですが、鞠智城の北西の方には、条里

の遺構とつながっているとおっしゃってしまして、条里制を敷くという、そういうものとも関連するのではないか。様々なインフラ整備が山城を中心として行われて、軍事的あるいは民政的な面で、連絡網を造っていく。そういう中で、七世紀の後半、白村江以後の中央集権化や古代国家の成立というものと大きく関わってくる。そういう施設だと思います。

また山城の麓に後に国府ができるという例は、資料編一八頁に挙げましたように、最近国府の中心部分が分かった讃岐ですね。城山というところの山城の麓に国府ができます。それから、岡山県の備中の鬼ノ城です、ここは五世紀以来の吉備氏の大拠点です。造山（ぞうざん・つくりやま）古墳という古墳があつて、さらに、瀬戸内海交通を押さえる津があるわけですから、それを見下ろす場所に鬼ノ城ができ、さらに後には備中の国府や国分寺が鬼ノ城の麓にできます。

それから、岡山県の備前の方も、大廻小廻というあたりの、少し離れています、やはり備前国分寺などもありますから、そういう後々の行政の中核になっていくような、そういったものが、山城の次の時代には整備されていく。という点で、地域のインフラ整備といえますか、地域の中核的な地域を造っていくという、そういう点でも山城の果たした役割は大きいのではないかと思います。

ただ、九州の大宰府以外は総領・大宰はなくなると申しましたが、一応史料14として挙げました『続日本紀』の文武四年（七〇〇）の通り、大宝令施行直前までは任命記事があります。そこには筑紫の総領とか、それから、周防の総領・吉備の総領ですね。ちよつと伊予は分かりませんが、直前まであります。おそらく大宝

令で、九州の太宰府以外の総領・大宰というものはなくなるのではないかと思います。

そして、総領・大宰がなくなった地域でいいますと、史料15には、これは突然出てくる記事ですけれども、備後国広島県の東部、安那郡の茨城とか、鞆田郡の常城といったような山城が廃止されたということで、総領・大宰がなくなった国は、やはり山城が維持されなくなる。いわゆる山城の時代が終わるのが大宝律令の施行前後だと思っています。

三、大宝律令の施行と地方支配の強化

そうした中で、鞠智城ですね、大宝律令施行直前に修理され、さらにまた、先ほどご紹介がありましたように、九世紀の後半まで続いていく、そういった特性というのはどこにあるのか。

資料編二九頁へ行っていただいて：では、大宝令施行前後ですね、そのあたりの地方支配の様子がどのようになっているか。二九頁に『続日本紀』の記事を中心に、ちょっと見にくいのですが、なるべくコンパクトに入れようと思ったので：年表風に作りました。

持統八年くらいから始まって、大宝二年のあたりまで、地方制度関係の記事をまとめてみました。

最初の持統八年の記事は、軍事ですね。地方を納める軍事の制度に関係するもの。それからまた後で触れますが、持統九年、文忌寸博勢を派遣するという、そういう覓国使みたいなものとの関係が出てきて、あるいは文武元年には陸奥の蝦夷が方物を貢上するとか、あるいは越後の蝦狄に賜物をするとかですね、どうも

南方や北方、それらの方面との関係を広げて、律令国家の版図といいますが、それを拡大していこうという意図があるのではないか。

以下、文武二年から記事が増えてきますが、その中にも同じような記事があります。特に鉱産物です。そういういたたものを、各地域から献上するという記事がありまして、各地域の特産品とか国家にとって役立つような鉱物、そういういたたものの調査をやりつつ……ということになっている。

それからまた、地方の、いわゆる地方行政をチェックするというような、そのようなこと。あるいは租税制度の整備に関わる事柄、そういういたた記事もありまして、その後大宝律令が施行され、さらにこの後の和銅とか養老年間くらいにも律令体制の整備が行われていくという、そういう時代です。

その中で、鞠智城の六九八年の記事を理解する上で、多少なりとも関係しそうなことは、先ほど、南の方だけでなく北の方との関係というのも、この時期見ることができるわけです。

特に、越後の蝦夷に賜物をするという記事は、二、三か所……上の年表を見ると、文武元年（六九七）もそうですね、文武三年というところにも一〇六人に爵を賜ったという記事がありまして、越後方面についてもなんらかの……これはおそらく、越後の北に出羽国というのでできるのですが、その建国への一つのステップではないかと思っています。

さらに、『続日本紀』を見ていきますと、史料16・17（資料編二九・三〇頁）に挙げました、石船柵いわふねのきですね、それを修理させるという記事が、六九八年、つまり鞠智城繕治と同じ年ですね、それから七〇〇年にも

行われます。石船柵は大化四年（六四八）に造られたということが『日本書紀』に出ていまして、そのあと六五八年から始まる阿倍比羅夫の北方遠征とか、そういったところの拠点として使われたものではないかと思いますが、それをこの時期に整備しているということとか、越後の人々、越後の蝦狄ですね、越後方面に
いるエミシの人々との関係を強化しようとしているとか、最終的には出羽国という新しい国を造って、さらにその、律令国家のクニというか、支配領域を広げていくという政策が行われているのが、大宝律令の前後だということです。これは、最後に述べる鞠智城の繕治というものを考える上で、その歴史的な背景になると思います。

四、鞠智城繕治の目的

そういった、いろいろと周りの事柄をお話ししまして、ようやく最後に、最初の「鞠智城繕治はどういう意味合いがあるのか」あるいは「どういった政策の中で出てくるのか」ということですね。これが資料編三〇頁になります。

この点に関しましては、文献史学の立場から申し上げますと、先ほど述べましたように、資料編二九頁の年表風の整理からも分かる通りに、この時期、種とか南島とか、南の方との関係。あるいは、薩摩とか大隅という地域、いわゆる隼人という人たちが住んでいるところ。そこに関する記事が結構出てきますから、やはり、文献史学のほうでは、古くから、対隼人政策とか、南島との通交ということで、理解するのが通説的

なところだと思っています。

ただ、鞠智城の報告書の中で、鞠智城の第Ⅱ期という時代は、いわゆる兵舎というのがなくなつて、防衛機能に関するものはあまりないから、考古学的には、防衛面とはあまりつながりがないのではないかということ、そこに挙げましたように、西海道統治のための、施設を整備するという考え方も出されています。

ただ、大宰府がやはり、先ほどの小田さんのご説明の中にも九州の統治とかそういうことも含まれていますから、大宰府の関係の施設整備ということ、南の方に対する版図を拡大するというようなことは、決して相容れないわけではないと思います。

その中で、この時期の隼人とか南島の対策を少し整理したのが、史料の18～22（資料編三〇頁）です。鞠智城の位置は、先ほどの大宰府との関係で、あるいは私の史料でいいますと、資料編三三頁のところですね、交通路というのがあります。大宰府から約六〇キロメートルということですから、資料編三三頁の上の図ですね。上の方に大宰府・大野城がありまして、そこからずっと下の左の方に肥後国府があるのですが、その肥後国府からやや右上にいったところに、鞠智城がありまして、肥後国府に行く道とはまた別に、車路くるみちというのがあつて、そういったもので大宰府とアクセスするという形ですね。そういう形で、大宰府と非常に密着している。それは確かにそうだと思います。

そしてまた、資料編三〇頁にお戻りいただいて…、隼人とか南島との関係でいいますと、吉村さんも触れられました、史料19という記事ですね。薩末の比売・久売・波豆とか、衣評督衣君県とか、助督衣君弓自美

とか、肝衝難波といった人たちが、覓国使を襲ったという記事があるのですが、その記事の中に肥人ひのひとが見えます。『続日本紀』の版本では「くまのひと」と訓じていますが、いわゆる「肥」ですから、肥後国の南の方ですね。熊襲といわれている地域。球磨郡とか、そのあたりでしょうか。その人たちを従えて、と書いておりますから、薩摩とか大隅の勢力、隼人の人たちと、肥人といわれている勢力が手を結んで、覓国使を襲ったということになっています。

ですから、南の方との関係というものを考える上で、肥後国の位置というのは大事であると思います。それで、薩摩との関係でいいますと、薩摩の国府は高城郡というところにあるのですが、高城郡とその北側にあって、肥後国と一番接する出水郡というところが、これはちよつと特別扱いでして、『薩摩国正税帳』ですと、それ以外に隼人十一郡という言い方をしています、高城郡と出水郡は隼人郡ではないという、そういう意識があります。

それから、吉村さんのご報告の中にも出てきましたが、国府がある、高城郡の郷名ですね。そこには、肥後国の郡名を持つ郷名がありますから、肥後国からある程度人が送り込まれて、そして、薩摩の支配に関連するのではないか。

図4というのが資料編三三頁にありまして、肥後国の国郡の配置を挙げておきました。線をひいたのが、高城郡の郷名と関係する、そういう郡ですね。大きく言って、肥後のやはり北の方の郡、国府周辺に近い、そのような郡から人が行っているわけですね。肥人というのが、球磨郡とかそういうあたりの人であれば、

当然そちらは薩摩と大隅の隼人と手を結ぶ勢力でしょうから、彼らを抑えるためには、肥後の北の方の人たちが頑張らざるを得ないという、そういうことを反映しているのではないかと思います。

それから、また資料編三〇頁に戻っていただきますと、出水郡の郡司ですね。高城郡と出水郡は隼人郡ではないと言いましたが、出水郡の郡司は大領が肥君、肥後の有力豪族。少領は五百木部、主政・主帳は夥伴部。夥伴部は、『万葉集』の中に、肥後国益城郡の人で、相撲人の大伴君熊凝という人がいると出てきますから、これも、肥後の豪族の可能性があると思います。このように見ますと、肥後国の北部地域は南の薩摩・大隅の隼人を抑えるために、様々な動員をされている、そういう郡ではないかと思います。

ですから、鞠智城を六九八年に修理をしたということですね。覓国使が、吉村さんのご報告の中でも、一回しか派遣されていなかったのか、二回派遣されたのかということがありまして、それから言うと、六九八年というのは史料19よりちょっと前になりますから、その評価をどうするのか。ただ、実際に戦闘をしなくても、南を抑えるという広い意味での、戦争になるかというのも含めてですね、その準備をするという意味では、鞠智城を修理してそれに備える、そのような形で鞠智城を整備することは十分に有り得るのではないかと思います。

その後ですが、南方では、七一三年に大隅国ができたり、それから種子島も行政的に整備されたり、南島人が都に上ってくるという記事が出ていますし、最後資料編三一頁のところを見ていただきますと、南島覓国使との関係、あるいはその後に薩摩国の建国に至るわけですけども、その建国の際には、戸籍というか、

民衆の調査をしたりして、それに対する反発があったのではないか。

そういったような事件はまだ伏流しておりまして、養老四年（七二〇）が隼人の最大の反乱。大隅国守が殺害されて、大規模な反乱が起きて、『続日本紀』には、そこに羅列しておきましたけれども、養老四年から、五年、六年、七年あたりに、平定記事とか、あるいは隼人を平定した人に対して位をあげるといった記事が出てきまして、それくらいかったという大きな事件が展開しています。

北の方は、ご承知の通り、九世紀の桓武天皇の時期など、さらにその後も蝦夷の征討ということが進むのですが、南九州に関しては、隼人の反乱は養老四年で終わって、この後は隼人の安定した朝貢が続くということになります。

そのあたりが、ちょうど鞠智城で言いますと、第Ⅱ期が終わって、第Ⅲ期というところなのかもしれません。ですからその点から考えますと、繕治の記事と第Ⅱ期の整備というものは、やはり結び付けて考えた方がいいのではないか、というのが私の考え方です。

むすびに

以上で、鞠智城の繕治ということ、山城の管理とか周知のあり方ですね。その背景にある時代的な要請や、国家的な課題というものから、若干考察を加えました。文献史料というものは大変限られています、もうすでにどなたかがおっしゃっているようなことを、私なりに整理したに過ぎないかもしれませんが、一応繕

治については隼人とか南方対策との関係を考えてみるとよいのではないか。

また、鞠智城はその後も存続していきまして、九世紀になりますと、今度は朝鮮半島の新羅の国が乱れていて、新羅海賊が北九州に出没するとか、有明海の方面にも来るとかいうことになりますから、またそこには鞠智城の役割というものがある、そういう時代時代に応じた役割によって鞠智城が果たす意味合いがあって、長く続くのではないのでしょうか。そういう時代時代の研究がさらに深まることを期待しまして、私の話を終えたいと思います。ありがとうございました。